

受動詞の意味的特徴に関する一考察

一 受身動詞との比較を中心に

孟 熙

要 旨

受身の意味を表すのに「見つけられる」や「教えられる」のような動詞の受身形(受身動詞)を使用せずに、「見つかる」や「教わる」のような語彙的なもの(受動詞)を使用する場面がある。このような受身動詞と受動詞が使用された文は類似した意味を表すが、ニュアンスが変わることが観察できる。本稿では「主観性」という観点からこれらの受身動詞と受動詞との意味的な特徴における異同を考察した。その結果、受動詞文は受身文より表現の主観性が低く、客観的にできごとを表現していることが分かった。また、自動詞的受動詞において、二格名詞句が現れるか否かにより、表現の主観性も変わり、二格名詞句が現れると、表現の主観性が高くなることも分かった。それに対し、他動詞的受動詞においては二格名詞句の存在が主観性に影響を及ぼさない。そのため、先行研究では自動詞的受動詞と他動詞的受動詞を同じく受動詞としているが、本稿の主観性という観点から見ると、自・他を分けて分析すべきであることが明らかになった。

キーワード

動詞の受身形 受動詞 主観性 意味的特徴 二格名詞句 カラ格名詞句

0 はじめに

日本語では、受動態の動詞は語基に助動詞の「-レル」「-ラレル」をつけ、受身の意味を表す。ところが、同じ格関係を持ち、さらに類似した意味を表すのに、動詞の受身形を使用せず、その受身形に相当する機能を果たす動詞を使用する場面がある。

- (1) 家出した学生が見つかった。
- (2) 私は田中先生から英会話を教わっている。

ここで、(1)、(2)の例文をその対応する他動詞の受身文に変換すると、以下のようになる。

- (1') 家出した学生が見つけられた。
- (2') 私は田中先生から英会話を教えられている。

いずれも、文としては成立するが、ニュアンスが変わったことが観察できる。日本語母語話者は自然に使い分けているが、日本語学習者にとっては学習困難点の一つである。そこで、本稿では「主観性」という概念を用い、このように受身形に相当する機能を果たす動詞の特徴を分析し、文法的手続きで作られた受身形との意味的特徴における異同を考察する。ここでは本研究の研究対象である動詞を「受動詞」と呼び、動詞の受身形を「受身動詞」と呼ぶことにする。

1 受動詞の定義

杉本(1991)では、他動化されても項の増減が生じず、二格名詞句を取るということから「受動詞」という動詞のタイプを提起している。すなわち、通常の二格名詞句を取る自動詞の場合では、他動化とは結合価がひとつ増加することであり、自動化とは結合価がひとつ減少することである。

- (3) a. 荷物が家に届いた。
b. 宅急便屋さんが荷物を家に届けた。

ところが、(4)に示すように、「捕まる」のような動詞は他動化しても結合価の増加が見られない。むしろ他動詞文とその受身文の対応に似ている。この点から、このような動詞を「受動詞」と呼ぶ。

- (4) a. 泥棒が警官に捕まった。
b. 警官が泥棒を捕まえた。
c. 泥棒が警官に捕まえられた。

杉本(1991)で示された受動詞のほかに、『日本語基本動詞用法辞典』と『日本語語彙大系』の二格を取る動詞語彙表より他動化しても結合価の増加が見られない動詞を採集すると、以下の動詞がある(下線は杉本(1991)にない動詞)。

- (5) a. 捕まる、見つかる、負ける、やぶれる、知れる
b. 苦しむ、傷つく、驚く、喜ぶ、悲しむ、悩む、狂う、脅える
(6) 授かる、教わる、言いつかる、ことづかる、借りる、預かる

(5)は杉本(1991)の用語を用い、自受動詞と呼ぶ。さらに、bは感情に関する受動詞であり、(6)は他受動詞である。(5b)は心理動詞であり、ほかの受動詞とは異なった性質を持っていると思われるため、別稿に譲り、本稿では、(5a)と(6)を対象とし、その意味的特徴を考察する。

2 意味的特徴の考察

杉本(1991)で「受動詞」と呼ばれるべき動詞類が存在すると指摘したのは非常に示唆的であり、主に間接受身文との類似性を中心に議論を進めている。本稿では、受動詞の意味的特徴を考察するために、「表現の主観性」という観点から受身動詞との比較を試みる。

表現の主観性という観点が益岡(1991)によって提案されている。表現の主観性とは、文における視点の置き方である。すなわち、表現者¹は主語の側に視点を置き、主語の立場から当該の事象を描いているか、それとも観察された事象を客観的、中立的な立場で叙述しているか、という問題である。

益岡(1987)では日本語の受身表現の意味的特徴と受動化の機能の検討により、受身文を「受影受動文」、「属性叙述受動文」、「降格受動文」の3つに分けた。また受影受動文と降格受動文は、特定の時空間に生起・存在する事象を表現する「事象叙述」とであると述べている。但し、降格受動文は動作主を背景化することを動機とする受身文であるため、動作主は表面には現れない。それに対し、受影受動文においては動作主は二格名詞句の形で表面に現れる。

益岡(1991)では同じく事象叙述に属する受影受動文と降格受動文を考察の対象に据え、表現の主観性を考察した。その結果、降格受動文は表現の主観性という観点から言えば、事象の生起を中立的な立場から客観的に表現した文であり、それに対し、受影受動文は対照的な性格を有することが分かった。受影受動文は、ある主体がある事象から影響を受けることを表し、主体の身に起こった出来事、すなわち主体の経験を表現する文である。主体の経験を表現する文であるため、中立的な立場ではなく、表現者が主体の側に立って当該の事象を描く。

本研究では益岡の分析を手がかりとして、本研究の受動詞と受身動詞について、表現の主観性という観点から考察する。

また、杉本(1991)では、自受動詞の「見つかる」において二格名詞句が出現するか否かにより、文のニュアンスが変わるということを指摘し、「見つかる」における不本意の意味合いについて考察した。

- (7) a. 家出した学生が見つかった。
b. 家出した学生が先生に見つかった。

例文(7)のように a では「家出した学生」が発見されたということを述べているだけであるが、b では学生の意に反するというニュアンスが出てくると杉本(1991)で述べられている。ところが、以下の文も実際に使用されている。

¹ 益岡では「表現者」という用語を使用している。本稿もそれに従う。

(8) 公園に乳児置き去り…「いい人に見つかって」とメモ

『産経ニュース 2011年5月7日』

この文においては、二格名詞句が出現しているが、明らかに主語の意に反するという不本意の意味ではないことが分かる。

そこで、本研究では杉本(1991)でいう不本意ではなく、言語現象をより広く説明できる表現の主観性という観点から考察を試みる。すなわち、「見つかる」において、二格名詞句が現れないと、その受動詞文は表現の主観性を持たずにできごとを客観的に述べているのに対し、二格名詞句が現れると、表現者が主語の立場に立ち、そのできごとを自身で体感しているようにことがらを描き、主観性を持つようになるのではないかと考えられる。

杉本(1991)では不本意のニュアンスについて「見つかる」と「捕まる」を考察したが、果たしてほかの受動詞においてはどうなるだろうか。本稿ではテストを用いて受動詞全般を考察する。

2.1 受身動詞

本稿で考察する受身動詞は「捕まえられる、見つけられる、負かされる、やぶられる、知られる」、「授けられる、教えられる、言いつけられる、言付けられる、貸される、預けられる」である。

(9) 動物虐待で飼主が警察に捕まえられるて処罰される。

(10) 家出した学生は先生に見つけられた。

(11) 口論になると、必ず私が妻に負かされます。

(12) 自己破産をしたことが職場や周りの人に知られてしまった。

(13) 革命軍は政府軍にやぶられた。

(14) 映子は同僚の滋子に5歳になる息子を無理やり預けられている。

(15) 神様に授けられた権威を持つ者として、犯すべからざる存在になった。

(16) 「井の中の蛙 大海を知らず」、母親にこの格言を教えられた。

(17) 太郎は母に浴槽の掃除を言いつけられた。

(18) 父に用をことづけられてきたのです。

(19) 人に手を貸される立場だって、自分で出来ることを他人にやられて、一種プライドを傷つけられたような形になる。

以上の例文はいずれも動作主である二格名詞句が現れており、文の主体が動作主から何らかの影響を受けることを表す受影受動文である。益岡(1991)では、受影受動文は表現の主観性を持つと述べている。これに従えば、(9)-(19)もいずれも表現の主観性を持つのであろう。

益岡(1991)で述べられているように、受影受動文は主観性を持ち、主体の経験を表す文である。したがって、受影受動文は、表現者自身の経験を述べるのが典型的な使い方である。3人称の人物も受影受動文の主体になれるが、視点の移動を許す物語型の文の場合に限られ、表現者が主語の側に立って表現者自身の経験であるかのように事象を描くのである。そこで、第3者の経験は視点の移動なしに表現することはできないため、「よ」のような、物語文ではなく対話文であることを特徴づける終助詞を伴った受影受動文は不自然であると益岡は主張している。

- (20) a. 太郎は電車の中で隣の人に足を踏まれた。
b.?太郎は電車の中で隣の人に足を踏まれたよ。
c. 私は電車の中で隣の人に足を踏まれたよ。

このように a の主体が第3者ではあるが、表現者が「太郎」の立場に立って自分が経験したかのように事象を描いている。第3者が主体に立っているため、視点を移動しなければならないが、b のように対話文であることを特徴づける終助詞「よ」を加えると、文が不自然になる。それに対し、c では1人称が主語に立っているため、視点の移動が必要ではなく、終助詞「よ」を加えても自然な文である。

そこで、本研究では終助詞の「よ」を使用し、受動詞文の主観性を検討する。許容度が高いと客観性も高く、主観性が低いことを意味すると考えられる。さらに、もう1つのテストも用い、主観性を検証する。それは「皮肉にも」「幸いにも」という文副詞を使用するテストである。文副詞とは『命題』を『外から』修飾して話者の『命題に対する心的態度』を表す(澤田 1993)ものであり、主観性と深く関わっていると考えられる。澤田(1993)では英語文副詞の分類原理を日本語文副詞の分類に適用させ、検証した結果、英語の分類方法はそのまま日本語に平行できることが分かった。すなわち、日本語の文副詞も「認識的」なグループと「評価的」なグループに分かれており、評価的な文副詞はさらに認識的なグループより、後続する命題の内容に対し、より主観的に表現していると述べている。評価的な文副詞には「幸いに、幸運に、奇妙にも、皮肉にも、奇しくも」などが存在しているが、本稿で分析する受動詞と意味的に共起しなければならないため、「皮肉にも」と「幸いにも」をテストとして使用する。このテストにおいては先ほどのテストの見方とは逆であり、許容度が高ければ主観性も強いと考えられる。

2.2 受動詞

2.2.1 自受動詞

表現の主観性について、17名の日本語母語話者に3段階評価でネイティブチェック²を

² 本稿では例文の自然さを三段階に判定する直感調査を行っている。さらに、天野(2011)のやり方に倣

行った。各文の後ろにある数値はその平均値であり、数値が大きいほど自然と判定される。

受動詞、受身動詞の語彙的な意味が自然さに影響をもたらす可能性もあるため、それを排除するために、受動詞文と受身文の数値を直接比較することをしない。本稿では受動詞文と受身文、さらに二格名詞句の現れた文と現れていない文、それぞれの終助詞「よ」のある文とない文の平均値の差を計算し、その差を比較する。もとの文の数値も参考にしながら、終助詞「よ」がある文とない文の差が小さければ、終助詞「よ」がある文は「よ」が用いられてももとの文とは自然さが変わらず、その動詞が用いられた表現の客観性が高く、表現の主観性が低いことを意味する。「よ」がある文とない文の平均値の差を「よ」がある文の平均値の後ろに下線を付けて示した。なお、「よ」をつけた後の自然さの変化をより直観的に示すために、以下のテストではすべて「よ」をつけた文の平均値引くもとの文の平均値という計算方法を取る(b-a, d-c, f-e, h-g)。平均値の差がマイナスとなる場合、「よ」をつけると文の自然さが下がることを意味し、平均値の差がプラスの場合はすなわち、自然さが上がることである。

まず、自受動詞の文を見てみる。

- | | | |
|-------------------------|---------|-----------------|
| (21) a. 万引きした中学生は捕まった。 | (2) | |
| b. 万引きした中学生は捕まったよ。 | (2) | <u>(0)</u> |
| c. 万引きした中学生は警察に捕まった。 | (2) | |
| d. 万引きした中学生は警察に捕まったよ。 | (1.941) | <u>(-0.059)</u> |
| e. 万引きした中学生は捕まえられた。 | (1.688) | |
| f. 万引きした中学生は捕まえられたよ。 | (1.765) | <u>(0.077)</u> |
| g. 万引きした中学生は警察に捕まえられた。 | (1.688) | |
| h. 万引きした中学生は警察に捕まえられたよ。 | (1.588) | <u>(-0.1)</u> |

「捕まるー捕まえられる」においては、二格名詞句の現れていない受動詞文 a と b の差は 0 であることが分かる。すなわち、二格名詞句の現れていない受動詞文は「よ」を付けても自然な文であり、客観性が高い。その文は客観的にできごとを表現しており、表現の主観性が低いと言えよう。その次に差が小さいのは二格名詞句の現れた受動詞文である。「よ」がある d もやはり自然さが非常に高いが、二格名詞句のない受動詞文 b よりはやや自然さが下がった。すなわち、二格名詞句が現れると、文の自然さに影響を与え、表現の主観性が現れるといえよう。

そして、最も差が大きいのは二格名詞句の現れた受影受動文の g と h である。このこと

い、「問題なく自然=2点/少し不自然=1点/全く不自然=0点」とし、その平均点を例文末に記す。また、この調査はどの文が最も自然であるという調査ではないため、被調査者が受動詞文と受身文をそのまま比較して自然さを判断しないように、実際のネイティブチェックの調査用紙は、論文での順番ではなく、ランダムに文を並べている。

から、受動詞文は「よ」を付けても文の自然さがあまり変化しないのに対し、受身文においては「よ」があると、もとの「よ」のない文より自然さが下がることが分かる。すなわち、受身文は受動詞文より表現の主観性が高いと言える。また、原因は明らかではないが、e と f の降格受動文において、終助詞の「よ」があると、自然さが上がることが観察できた。

- (22) a. 逃走していた犯人は見つかった。 (2)
 b. 逃走していた犯人は見つかったよ。 (1.941) (-0.059)
 c. 逃走していた犯人は警察に見つかった。 (1.824)
 d. 逃走していた犯人は警察に見つかったよ。 (1.647) (-0.177)
 e. 逃走していた犯人は見つけられた。 (1.647)
 f. 逃走していた犯人は見つけられたよ。 (0.882) (-0.765)
 g. 逃走していた犯人は警察に見つけられた。 (1.75)
 h. 逃走していた犯人は警察に見つけられたよ。 (1.562) (-0.188)

「見つかる－見つけられる」においては、やはり最も差が小さいのは二格名詞句の現れていない受動詞文であり、その次は二格名詞句の現れた受動詞文であることが分かる。すなわち、「見つかる」においても、二格名詞句の現れていない受動詞文は「よ」を付けても文の自然さが影響を受けず、自然さが非常に高いため、客観性が高く、主観性が低いと思われる。二格名詞句が現れると、平均値の差は二格名詞句が現れていない受動詞文より大きくなり、主観性も高くなると言えよう。受動詞文に対し、受身文においては「よ」を付けるとさらに自然さに影響を与え、もとの文との平均値の差が大きくなることが分かる。すなわち、「見つかる－見つけられる」においても、受身文は受動詞文より客観性が低く、主観性が高い。但し、ここで目立つのは降格受動文 f の数値であり、「よ」のない e との差が非常に大きい。その理由はまだ明らかではなく、今後の課題としたい。

- (23) a. 口論になると、弁護士の北村はいつも負ける。 (2)
 b. 口論になると、弁護士の北村はいつも負けるよ。 (1.824) (-0.176)
 c. 口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負ける。 (2)
 d. 口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負けるよ。 (1.824) (-0.176)
 e. 口論になると、弁護士の北村はいつも負かされる。 (1.875)
 f. 口論になると、弁護士の北村はいつも負かされるよ。 (1.588) (-0.287)
 g. 口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負かされる。 (1.733)
 h. 口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負かされるよ。 (1.294) (-0.439)

「負ける－負かされる」においてもやはり受動詞文における「よ」のある文とない文の

差が最も小さいことが分かる。但し、「捕まる」、「見つかる」及び次に分析する「やぶれる」と異なるのは二格名詞句が現れた文 c と d の差は二格名詞句が現れていない文 a と b の差と変わらないことである。この点については動詞の派生と関連していると考えられる。奥津(1967)では、自動詞と他動詞の対立に自動化、他動化と両極化の三つがあると述べ、「as/kas/os/se/s」は他動化辞であり、「ar/are/sar/or/ur」は自動化辞であると述べている。これに基づいて本稿で考察する受動詞を見てみると、「見つける mitsuk-E-ru→見つかる mitsuk-AR-ru」のように、「見つかる」、「捕まる」、「やぶれる」、「知れる」及び他受動詞はいずれも対応する他動詞から自動化された動詞であることが分かる。「負ける」のみは「負ける mak-E-ru→負かす mak-AS-u」のように、ほかの受動詞と異なり、「負ける」が基本の動詞とも言え、他動化されて「負かす」となる。「見つかる」などの自動詞は「見つける」などの他動詞から自動化のプロセスにより派生される過程の中で、動作主である二格名詞句は背景化されると考えられる。これに対し、「負ける」は逆の派生のプロセスである。このような派生のしかたの異なりが「負ける」がほかの受動詞と異なる現象を見せたことの原因になっていると考えられる。派生の問題については今後詳しく考察する。

終助詞「よ」のテストに戻る。(23)の受身文 e, f, g, h においては差が大きく、特に受影受動文の「よ」のある文 h とない文 g の差が最も大きかった。すなわち、「負けるー負かされる」においても受身文は受動詞文より主観性が高いと言える。

- (24) a. アメリカチームは準決勝でやぶれた。 (2)
 b. アメリカチームは準決勝でやぶれたよ。 (1.813) (-0.187)
 c. アメリカチームは準決勝でドイツチームにやぶれた。 (2)
 d. アメリカチームは準決勝でドイツチームにやぶれたよ。 (1.75) (-0.25)
 e. アメリカチームは準決勝でやぶられた。 (0.5)
 f. アメリカチームは準決勝でやぶられたよ。 (0.438) (-0.062)
 g. アメリカチームは準決勝でドイツチームにやぶられた。 (0.6)
 h. アメリカチームは準決勝でドイツチームにやぶられたよ。 (0.467) (-0.133)

「やぶれるーやぶられる」においても、受動詞文は「よ」をつけると、自然さはやや落ちるが、それでも自然さが高いままである。また、ここでもやはり二格名詞句の現れた受動詞文の「よ」のある文とない文との差が二格名詞句の現れていない受動詞文の差より大きいことが観察できる。したがって、二格名詞句の現れた受動詞文は現れていない受動詞文より主観性が高いと言えよう。しかし、ここで問題となるのは受身文の e, f, g, h は二格名詞句が現れるか否か、「よ」が付いているか否か、いずれも平均値が 1 以下となっており、不自然な文と見ても良いだろう。これは何らかの語彙的な制約によるのではないかと考えられる。但し、それでも観察できるのは「よ」をつけると、自然さはさらに下がることである。

- (25) a. 自己破産したことは知れてしまった。 (1.286)
 b. 自己破産したことは知れてしまったよ。 (1.313) (0.027)
 c. 自己破産したことは会社に知れてしまった。 (1.313)
 d. 自己破産したことは会社に知れてしまったよ。 (1.467) (0.154)
 e. 自己破産したことは知られてしまった。 (1.875)
 f. 自己破産したことは知られてしまったよ。 (1.6) (-0.275)
 g. 自己破産したことは会社に知られてしまった。 (1.875)
 h. 自己破産したことは会社に知られてしまったよ。 (1.667) (-0.208)

「知れる-知られる」においては、受動詞文では、興味深いのはもとの文 a と c の自然さは受身文 e と g ほど高くないが、「よ」をつけると自然さは下がるかわりに、わずかでありながら上がっていることが観察できることである。すなわち、「知れる」においては「よ」をつけても自然さが下がらず、その文章は客観的にできごとを表現しており、表現の主観性が低いと言えよう。また、「知れる」の受動文もやはり二格名詞句の現れない文のほうで、「よ」をつける際、自然さの変化が少ない。受身文においては、主語に立つのは人間ではなく、非情物であるため、「自己破産した」潜在的受影者が存在すると考えられる。しかし、その潜在的受影者は話者とも第 3 者とも解釈できる。もしネイティブチェックの被調査者が潜在的受影者を話者と解釈した場合、視点の移動が必要でなく、「よ」があっても自然さは変わらないはずである。被調査者が潜在的受影者を第 3 者と解釈した場合、自然さが下がることが予測される。このように、被調査者により、二通りの解釈ができるため、調査結果に影響を与える可能性があるが、e と g を見ると、「よ」がある文はいずれも自然さが下がることが観察できるため、やはり「知られる」受身文は終助詞「よ」と馴染みにくく、客観性が低く、主観性が高いのであろう。

以上のネイティブチェックの結果から分かるように、受身文は終助詞「よ」と共起すると、いずれももとの文より自然さが下がることが分かる。受動詞文においても「よ」があるとやや自然さが下がることがあるが、もとの文との平均値の差は受身文ほど大きくない。また、受動詞文においては、二格名詞句が現れるか否かにより、「よ」のある文とない文の差も異なる。二格名詞句が現れた場合、「よ」があると、差が大きくなることが観察できた。

したがって、自受動詞は受身動詞より表現の客観性が高く、主観性が低いと言っても良いだろう。すなわち、受身文では表現の主観性を持っており、それに対し、受動詞では、特に動作主である二格名詞句が現れない場合、主観性を持たず、表現者が客観的な立場に立ってことばを表現する。二格名詞句が現れると、主観性も現われる。二格名詞句が自受動詞の意味的特徴に変化を引き起こすと考えられる。

さらに、文副詞の「皮肉にも」「幸いにも」を使用したテストは以下のものである。こ

のテストでももとの文との平均値の差を考慮しながら、受身文と受動詞文の主観性を検討する。また、平均値の示し方は終助詞「よ」のテストと同様に、自然さの変化をより直観的に示すために、文副詞をつけた文の平均値引くもとの文の平均値という計算方法を取る (b-a, d-c, f-e, h-g)。

- (26) a. 家出した学生は見つかった。 (2)
 b. 幸いにも、家出した学生は見つかった。 (1.933) (-0.067)
 c. 家出した学生は先生に見つかった。 (1.533)
 d. 幸いにも、家出した学生は先生に見つかった。 (1) (-0.533)
 e. 家出した学生は見つけられた。 (1.375)
 f. 幸いにも、家出した学生は見つけられた。 (1.4) (0.025)
 g. 家出した学生は先生に見つけられた。 (1.667)
 h. 幸いにも、家出した学生は先生に見つけられた。 (1.875) (0.208)

一見、cの受動詞文が受身文aとbよりも高い数値を取っているが、被調査者の指摘にあった「「見つかる」のほうはよく使っているような気がする」のように文副詞以外の要因も入っているため、文副詞のある受動詞文と受身文を直接比較することが適切ではなく、もとの文副詞のない文と比較すべきだと思われる。(27)を見ると、興味深いことに受動詞文においては「幸いにも」が付くと、二格名詞句が現れるか否かにかかわらず、いずれも自然さがもとの文より下がるのに対し、受身文では文副詞「幸いにも」を付けると、もとの文よりも自然さが上がることである。これはすなわち、受身動詞のほうは文副詞と馴染みやすく、後続する命題の内容に対し、より主観的に表現していると言えよう。

- (27) a. 優等生とされてきた太郎は万引きで捕まった。 (1.867)
 b. 皮肉にも、優等生とされてきた太郎は万引きで捕まった。 (1.8) (-0.067)
 c. 優等生とされてきた太郎は万引きで私服警官に捕まった。 (1.75)
 d. 皮肉にも、優等生とされてきた太郎は万引きで私服警官に捕まった。 (1.733) (-0.017)
 e. 優等生とされてきた太郎は万引きで捕まえられた。 (1.6)
 f. 皮肉にも、優等生とされてきた太郎は万引きで捕まえられた。 (1.25) (-0.35)
 g. 優等生とされてきた太郎は万引きで私服警官に捕まえられた。 (1.375)
 h. 皮肉にも、優等生とされてきた太郎は万引きで私服警官に捕まえられた。 (1.562) (0.187)

「捕まる」においても二格名詞句が現れる文も現れない文も文副詞の「皮肉にも」が付くと、自然さが下がる。それに対し、二格名詞句の現れた受影受動文においては、「皮肉

にも」のある h がもとの文 g よりも自然さが上がっていることが分かる。すなわち、(27) において、受動詞文は受身文より事象を主観的に表現する文副詞と馴染みにくく、表現の主観性が低いと言えよう。ところが、降格受動文 e に「皮肉にも」をつけると、自然さがかなり下がることが観察できる。すなわち、「捕まえられる」が使われる降格受動文においては、表現の主観性は受影受動文より低いことが分かる。

- (28) a. 口論になると、弁護士の北村はいつも負ける。 (2)
 b. 皮肉にも、口論になると、弁護士の北村はいつも負ける。 (1.867) (-0.133)
 c. 口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負ける。 (2)
 d. 皮肉にも、口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負ける。 (1.929) (-0.071)
 e. 口論になると、弁護士の北村はいつも負かされる。 (1.875)
 f. 皮肉にも、口論になると、弁護士の北村はいつも負かされる。 (1.5) (-0.375)
 g. 口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負かされる。 (1.733)
 h. 皮肉にも、口論になると、弁護士の北村はいつも妻に負かされる。 (1.785) (0.052)

「負ける」もほかの受動詞と同様に、後続する命題の内容に対して主観的に表現する文副詞と共起すると、自然さが下がることが分かる。それに対し、「負かされる」においては二格名詞句が現れた受影受動文 g と h は文副詞がつくと、自然さは逆に上がる。しかし、降格受動文 e は文副詞がつくと、自然さが下がる。すなわち、受影受動文において、文副詞が現れると、主観性が強くなるため、受影受動文は文副詞と馴染みやすいのに対し、降格受動文は文副詞と馴染みにくい。

- (29) a. プロ棋士の石井はやぶれた。 (1.824)
 b. 皮肉にも、プロ棋士の石井はやぶれた。 (1.765) (-0.059)
 c. プロ棋士の石井は小学生にやぶれた。 (1.882)
 d. 皮肉にも、プロ棋士の石井は小学生にやぶれた。 (1.706) (-0.176)
 e. プロ棋士の石井はやぶられた。 (0.471)
 f. 皮肉にも、プロ棋士の石井はやぶられた。 (0.412) (-0.059)
 g. プロ棋士の石井は小学生にやぶられた。 (0.294)
 h. 皮肉にも、プロ棋士の石井は小学生にやぶられた。 (0.2) (-0.094)

「やぶれる」もやはりほかの受動詞と同様に、文副詞が付くと、自然さが下がることが観察でき、文副詞と馴染みにくく、表現の主観性が低いと言えよう。「やぶられる」は何らかの語彙的な制約により、自然さが非常に低く、いずれも平均値が 1 以下となっているため、不自然な文であり、そのまま平均値を比較することもできないと考えられる。

- (30) a. 自己破産したことは知れてしまった。 (1.286)
 b. 皮肉にも、自己破産したことは知れてしまった。 (0.563) (-0.723)
 c. 自己破産したことは会社に知れてしまった。 (1.313)
 d. 皮肉にも、自己破産したことは会社に知れてしまった。 (1.125) (-0.188)
 e. 自己破産したことは知られてしまった。 (1.875)
 f. 皮肉にも、自己破産したことは知られてしまった。 (1.25) (-0.625)
 g. 自己破産したことは会社に知られてしまった。 (1.875)
 h. 皮肉にも、自己破産したことは会社に知られてしまった。 (1.5) (-0.375)

「知れる」も文副詞が付くと、二格名詞句が現れたか否かによらず、いずれも自然さが下がる。特に二格名詞句の現れていない受動詞文 a に文副詞が付くと、b のように平均値が 1 以下となり、不自然な文となることが目立つ。このことから受動詞文における二格名詞句が表現の主観性を影響すると分かる。ところが、「知られる」の文も文副詞が付くと、自然さが下がることが観察できた。この点についてはさらに詳しく検討する必要があると思われる。

以上、終助詞「よ」及び文副詞のテストを用い、受身動詞と自受動詞の主観性における異なりを考察した。この二つのテストにより、受身動詞は表現の主観性が高いのに対し、自受動詞は表現の主観性が低く、客観的にできごとを表現していると言えよう。しかし、二格名詞句が現れた受動詞文は主観性も多少現れることが分かった。

2.2.2 他受動詞

以上は自受動詞における表現の主観性を考察したが、他受動詞も見てみる。ここも終助詞「よ」を使用した。(6)に挙げた他受動詞は意味的には共通しており、「教える」のような主に情報の移動を表す他受動詞、「授かる」「預かる」「借りる」のようにものの移動を表す他受動詞、「言いつかる」「ことづかる」のように人間の言語行動と関わる他受動詞に分けることができるため、本稿ではそれぞれの代表的な動詞「教わる」、「授かる」、「ことづかる」をテストした。また、他受動詞においては「カラ」格が使用されることもあるため、「カラ」格を用いた例文の自然さもテストした。

- (31) a. 花子は料理を教わっている。 (1.938)
 b. 花子は料理を教わっているよ。 (1.875) (-0.063)
 c. 花子は太郎に料理を教わっている。 (2)
 d. 花子は太郎に料理を教わっているよ。 (1.938) (-0.062)
 e. 花子は太郎から料理を教わっている。 (2)
 f. 花子は太郎から料理を教わっているよ。 (1.933) (-0.067)
 g. 花子は料理を教えられている。 (1.067)

- h. 花子は料理を教えられているよ。 (1) (-0.067)
- i. 花子は太郎に料理を教えられている。 (0.875)
- j. 花子は太郎に料理を教えられているよ。 (0.867) (-0.008)
- k. 花子は太郎から料理を教えられている。 (1.25)
- l. 花子は太郎から料理を教えられているよ。 (1.438) (0.188)

「教わる－教えられる」をまず見る。受動詞の「教わる」は「よ」があっても、自然さは非常に高く、「よ」のない文との平均値の差は非常に小さいことが分かる。ところが、前節の自受動詞とは異なり、二格名詞句が現れたか否かにより、文の自然さの差における大きな違いが観察できない。また、目立つのは受身文の k と l のカラ名詞句が現れた文では「よ」のある文は自然さがやや上がることである。これは、カラ格名詞句が現れた受身文は降格受動文であるため、受影受動文と異なり、表現の主観性が低く、客観性が高いことによると考えられる。これはカラ格名詞句は二格名詞句と異なる性質を持つことを示唆しているのであろう。

- (32) a. 花子は子供を授かった。 (2)
- b. 花子は子供を授かったよ。 (1.933) (-0.067)
- c. 花子は神様に子供を授かった。 (1.214)
- d. 花子は神様に子供を授かったよ。 (1.4) (0.186)
- e. 花子は神様から子供を授かった。 (1.938)
- f. 花子は神様から子供を授かったよ。 (1.867) (-0.071)
- g. 花子は子供を授けられた。 (1.067)
- h. 花子は子供を授けられたよ。 (0.813) (-0.254)
- i. 花子は神様に子供を授けられた。 (1.625)
- j. 花子は神様に子供を授けられたよ。 (0.8) (-0.825)
- k. 花子は神様から子供を授けられた。 (1.5)
- l. 花子は神様から子供を授けられたよ。 (1.625) (0.125)

「授かる－授けられる」においては、やはり「授かる」は「よ」があっても自然さが高いままであり、主観性が低いと言えよう。また二格名詞句の現れた受動詞文 c は「よ」があると、自然さがやや上がることが観察でき、文は主観性が低く、客観性が高いと言えよう。これは他受動詞が自受動詞と異なる点であり、自受動詞では二格名詞句が現れると主観性が高くなるのに対し、他受動詞ではそれが観察できない。

「授けられる」においては二格名詞句が現れた際、「よ」があると、自然さが非常に下がり、不自然な文となる。すなわち、受影受動文は客観性が低く、表現の主観性が高いと言えよう。それに対し、カラ格名詞句が現れた際は、(31)の「教えられる」の例と同様に「よ」

があると、逆に自然さがやや上がることが観察できた。

- | | | |
|-----------------------|---------|-----------------|
| (33) a. 花子は伝言をことづかった。 | (1.938) | |
| b. 花子は伝言をことづかったよ。 | (1.625) | <u>(-0.313)</u> |
| c. 花子は父に伝言をことづかった。 | (1.75) | |
| d. 花子は父に伝言をことづかったよ。 | (1.438) | <u>(-0.312)</u> |
| e. 花子は父から伝言をことづかった。 | (1.938) | |
| f. 花子は父から伝言をことづかったよ。 | (1.688) | <u>(-0.25)</u> |
| g. 花子は伝言をことづけられた。 | (1.733) | |
| h. 花子は伝言をことづけられたよ。 | (1.438) | <u>(-0.295)</u> |
| i. 花子は父に伝言をことづけられた。 | (1.467) | |
| j. 花子は父に伝言をことづけられたよ。 | (1.333) | <u>(-0.134)</u> |
| k. 花子は父から伝言をことづけられた。 | (1.6) | |
| l. 花子は父から伝言をことづけられたよ。 | (1.533) | <u>(-0.067)</u> |

「ことづかるーことづけられる」では、やはり受動詞文のほうはいずれも受身文より平均値が高いことが分かる。すなわち、受動詞文は受身文より主観性が低いと言えよう。また、「ことづかる」において、二格名詞句が現れても「よ」のある文とない文の平均値の差が二格名詞句の現れない文の差とほぼ変わらないことが分かる。やはり自受動詞と異なり、他受動詞における二格名詞句が主観性に影響を及ぼさないと言えよう。また、受身文においても、受動詞文においてもカラ格名詞句の現れた文が最も自然さの変化が小さいことが分かる。

以上のテスト³により、他受動詞も対応する受身動詞より表現の主観性が低いことが分かる。しかし、自受動詞と異なり、二格名詞句の出現による文の自然さの変化は自受動詞より小さいことが分かる。

3 まとめと今後の課題

本稿では受動詞の意味的特徴を自受動詞と他受動詞に分けて「表現の主観性」という観点から考察を行った。その結果、受動詞文、特に二格名詞句の現れていない受動詞文は受身文より表現の主観性が低いことが分かった。

また、自受動詞においては二格名詞句の存在が非常に重要であり、自受動詞文の意味的特徴に変化をもたらすことが分かった。動作主である二格名詞句が現れないと表現の主観性を持たないが、二格名詞句が現れると、多少主観性が現れ、不本意の意味合いも現れる。

³ 本稿で使用したネイティブチェックの調査用紙は非常に内容が多いため、被調査者の負担を軽減するために、他受動詞の主観性を判定するテストは終助詞「よ」のテストのみを実施した。

ニ格名詞句の存在がその意味合いを導き出したということが分かった。それに対し、他受動詞においては、ニ格名詞句がもたらす主観性の変化は自受動詞ほど大きくないことも明らかになった。このように、自受動詞においてニ格名詞句の存在が極めて重要であるが、他受動詞においては、ニ格名詞句のみでなく、カラ格名詞句も使用され、動作主を表す。杉本(1991)では自受動詞と他受動詞を同じく受動詞としているが、本稿でいう表現の主観性という観点から見ると、自・他を分けて分析すべきであると考えられる。

本稿では言語現象の提示にとどまっているが、今後はニ格名詞句が自受動詞句の意味的特徴に影響を与える理由も検討したい。また、今回のネイティブチェックは被調査者の人数が限られており、これから人数を増やし、より精確な結果を求める必要があると思われる。

参考文献

- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』 笠間書院.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形」『国語学』 70.
- (1983) 「何故受身か?-〈視点〉からのケース・スタディ」『国語学』 132.
- 澤田治美 (1993) 『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』 ひつじ書房.
- 杉本武 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社.
- (1991) 「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」 仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1978) 『日本語の文法』 国立国語研究所.
- (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版.
- (1991) 「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版.
- (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』 くろしお出版.

辞書類

- 小泉保 (編)(1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店.
- NHK コミュニケーション科学基礎研究所 (編)(1999) 『日本語語彙大系 CD-ROM 版』 岩波書店.
- (孟熙 筑波大学大学院生)

The Semantic Characteristics of Passive-like Verbs (*Judoshi*) : In comparison with Passive Verbs

MENG Xi

In Japanese, when we want to focus on the object of an action, we usually use passive verbs “-rareru”. In the same way, we can use passive-like verbs (*Judoshi*). The passive verbs and *Judoshi* are similar with each other, but there are still some subtle differences in meaning between them. This paper investigates those differences from the viewpoint of “subjectivity of expression”. This paper figures out that, from the viewpoint of “subjectivity of expression”, passive verbs are more subjective than *Judoshi* and *Judoshi* are more objective than Passive verbs. But when the NP-*ni* appears, the subjectivity of *Judoshi* will increase.